

# Yima の xvarānah 三翔のさす

伊 藤 義 教

Yast (Yt.) 193a-38 に *yaōnō* Yima より *xvarānah* (帝王的の光輪・榮光) が *vāriyāna* 鳥の姿となりて三度び去りゆきしが、それは *Miθra* 神により、*ōraetaona* により、最後には *Karāsaspā* によりて捉えられたのである。これを釋くの提唱された J. Darmesteter の二説は A. Christensen 博士によりて駁せられ、代えるに Yima の三回造罪説を以つてられた。三回造罪説は Yt. 5 及び 15 に *yaōnō* *ōraetaona* が帝王と看做されていない點を考慮に入れて立論されている。即ち、日神の子 Yima が初回造罪によりて失つた光輪が太陽と關係深き *Miθra* によりて保管されるが、やがて Yima がこれを回復する。Yima の再犯と共に光輪は *ōraetaona* に移る、かれはこの力によりて僭主 *Dahaka* を逐ぎ、光輪はまた復位せる Yima にかえむ。然るにまた造罪のこと Yima でありて光輪は失われ *Karāsaspā* に移つた。 *ōraetaona* によりて始められた *Dahaka* 討伐の業を終末の日に成就する *Karāsaspā* の役割 (*Pahlavi* 語書) は Yt. 5 及び 15 から推定出来る。 Yt. 19 の檢討からそれが可能である、即ちこの *Karāsaspā* による終末の日に於ける *Dahaka* 討伐の業なるものは、 *Karāsaspā* が原史時代に於て Yima の光輪喪失物語中に占めていたであろう役割の終末觀的回歸に外ならず、従つて *Karāsaspā* の光輪關與は當然であ

Yima の xvarānah 三翔のさす (伊 藤)

るというのである。然し *Karāsaspā* の終末觀的功業からその原史時代に於る功業を溯考し、 *ōraetaona* との關聯に於て *Karāsaspā* が Yima の光輪喪失物語上に占めていたであろう役割を推定した點は、少くとも結論的には誤つていないが、テキストに在證されぬ三回造罪の假定を、 *Yam-Dahak-Freton* (*ōraetaona* の中世語形) ~ *Frē* と立つるインフラスター語書に對し Yima ~ *Dahaka* ~ *ōraetaona* ~ *Karāsaspā* なる順位を擧示する Yt. 5 及び 15 の立場に對する解明不十分等の點に於て、委曲を盡したものはいい難い。  
*Miθra* の登場は、上記 A. Christensen 博士の指摘された面からも首肯出来るが、また帝王と *Miθra* との深い關係や王家の祖神としての斯神の面からも、例えばヘーロドトス「歴史」三・八六に傳える *Daravavahus* 大王が王者に選出される時の光景、<sup>(2)</sup> *Artaxšassa* 二世並びに同三世の碑文における *Miθra* の登場、亞歷山譚中の諸句等々の *miθra*、<sup>(3)</sup> G. Widengren: *Hochgotteglaube im alten Iran*, p. 146 ff. によりて擧示された夥しい場面からも、理解出来る。よつて Yima に不祥のことありしために光輪が *Miθra* によりて保管されたとするその理由がある。 *ōraetaona* の光輪捕捉は理由を述べるまでもないことであり、問題はイランの王統に列したることなき *Karāsaspā* の光輪關與にあるのである。さてその光輪につい

つてあるが、これは普通考えられてくるようにイランの正統の帝王  
 のみ附随してつたのではなく、例えはマンノ入 Frāšnāyan と  
 一併のことなかつた (Yt. 1993) のみならず、Yt. 1947-51 に  
 於て光輪は Apām Napāt に屬したり Artaur に屬したりしたほか  
 は Dahāta によつて屬していらしむことが分るのである。このこと  
 は光輪附隨の本来の意味がその人物の系統如何にあるのではなく、  
 寧ろそれを掌握する力あることによつて帝王たりうることを示すに  
 あると共に、後にも示す如く、光輪物語が唯一本の系統のみでな  
 かつたことを示すものとするべきであろう。この二つ問題の Kārāsāpa  
 であるが、Anahit Yt. 537 に於ける、<sup>(4)</sup> されは Pīšnah 海を流し  
 じ Anāhita 女神に供養したことをり、Great Bundahišn (GrBd.)  
 1971ff. 中の地を Kabul 地方ともいふ、Pahlavī Vīdēvdāt 1,  
 2 Vaekarāta と Kapul とつては Kārāsāpa とを結びつて  
 する<sup>(5)</sup>、<sup>(6)</sup> されと東部イランとの結びつては中へから認められ  
 じ、<sup>(7)</sup> 且つ Fravartin Yt. 1316 と H. S. Nyberg: Die Re-  
 ligionen des alten Iran p. 291 f. の S. in Vayu 教團に屬す Vayu  
 Yt. 1516 とを比較しては、該教團に屬する聖の人間な Yt.  
 1316 には危険視され、それらに對する畏懼を Kārāsāpa の fra-  
 vaši に求めしむることが分る (S. Wikander: Vayu I, 108ff.)。  
 この Kārāsāpa には有角龍討伐の業がある (Yt. 1940-44) と共  
 に、「不死者」として終末の日に起生し Bēvarāsp (Dahaka) を最  
 終的決定的に誅戮する役割が賦與されてくる (GrBd. 1971ff., 2203  
 ff.)。興味あるものに、Kārāsāpa (Yt. 537) と同様 Anāhita に供  
 養してつたに因縁を語つてくる Ašvazdah (Purutašāsti) の十。  
 —Yt. 572) は Denkart ed. by Madan (Dk. M.) 8051a f. に於

て「不死者」の一人として Ašvazd i Purutašāst 'pus 'ke 'pahi-  
 kšāh 'apar 'pat bālist i paštārtom daš i Pēšmas といふ GrBd.  
 1972 ff. に於「不死者」としての彼について Ašvazd i 'pus i  
 Purutašāstān……'pat fraškart kartārīh 'o adyārīh i Sošyans  
 be 'rašet といふ。即ち彼も亦東部イランの Pīšnah と結びつけ  
 られ、終末の日に起生して Sošyans に於ける世の建直しに業に参到す  
 るものとされてくる。而して Ašvazdah の對應汎イラン語形  
 を借用繼承せるメンエムの Artavazd なる英雄にも龍討伐の功  
 業がある (S. Wikander: op. cit., p. 177 f.)。多分同一人物であ  
 らうし、然りすれば Kārāsāpa と多くの共通點を有していること  
 となる。そしてこのことでは、登場人物の名は異なるも主眼におつて同  
 一なるキーゼがいくつを存してつたことを物語のそのであらう。

東部イラン Kānsaoya 湖 (Hāmūn 湖) を中心とする地域は早  
 く Kavi 國<sup>(8)</sup> といふ Kavidom の成立した地として、その Kavi  
 たちでは光輪が随伴してつたといはれる (Yt. 196 ff.)。それゆ  
 え、この Kay (Kavi の中世語形) 族の光輪その身に於ける Kay  
 Vahnām と Ušetar 十年紀の到来と先立ちで行われる戦闘に當  
 つて Kāvīnistān への興起たることを (GrBd. 2171 ff.) の、或  
 はまたこの湖中に Anāhita 女神に於ける保管される光輪が三燈  
 炬となつて終夜輝き、時たらば少女を嫁がせて未來の三時に出現す  
 る三 saošyant の母たらうといふことを (GrBd. 2207 ff.—cf. Yt. 1922)  
 の、けだし當然であらう。とすれば東部イランには光輪に關する  
 諸サーゼがあり、このサーゼはちとらくはインド・イランの基底を  
 もつる Yima を中心に展開してつたのであらうが、本来終焉をみ  
 るべき命運にまつたが故に彼が光輪を喪失したのちに、これを獲得

して替主 *Dahāka* を討伐した人物は、*Kārāsāpa* であつたり *Aśa vazdah* (*Artavazdah*) であつたりするにしように、サーゲの圖を異にするに應じて異同があつたものと考へることは、全く合理的といわざるを得まい。このいわば地方的、局所的なる諸サーゲが *Vast* の編纂者によつて、獨自の祇教的見地から取りあげられ、*Kārāsāpa* は *eratāona* としう、より廣くインド・イランの基底をもつ人物との角逐において、光輪の常時把握をこれに譲るに至つたが、なお *Yt. 19a* において古い名残をとどめてゐると解すべきではなからうか。この兩雄の角逐における *Kārāsāpa* の敗退は、かれが *eratāona* の次席に列する順位 (*Yt. 5* 及び *15*)<sup>1)</sup> *eratāona* の討伐した龍が有名 (*Azi Dahāka*) なるに對し *Kārāsāpa* のそれは無名であること、前者の龍討伐が未完であつたものを終末の日に起生してこれを完成するにしようふうに後者の行動が補足的な方向に動いてゐることなどによつても、これを窺ふことが出来るが、箇中の消息を最もよく啓發するものは *DE.M. 813a ff.* の記事であらう。これは「*Frētōn* (*eratāona*) が *Māzandarān* 諸州の人間と *Pēsāntikas* の野で出會つたこと」を取扱つたものである。*Māzandarān* は北部イラン、カスピ海南沿の低地帯で古來魔棲の地とされてゐる<sup>2)</sup>、*Frētōn* がこの *Māzandarān* 人を討伐したことは有名な事蹟として謳われてゐるところである。而して今 *J. Markwart: Caucasica, fasc. 6, I, p. 46 ff.* の *Pēsāntikas* を *Pisīnah* (*Yt. 5a*) に比定し<sup>3)</sup>、しか<sup>4)</sup> *Yt. 5a* になす *Kārāsāpa* が登場してゐる點に明らかなること<sup>5)</sup>、はじめて *Kārāsāpa* が戰鬥の主役を演じてゐたのにそれが *Frētōn* (*eratāona*) に移讓され、のちに西方 *Māzandarān* に移されたと主張してゐる。これは

Yima の *xvarānah* 三翔のころ (伊藤)

明らか、われわれの提唱する兩雄の角逐と *Kārāsāpa* の敗退とを物語る方向にあるものと稱して差支えない。

而して *Yima* の光輪三翔をめぐる登場する人物の特色は、彼をも含めて終末觀的な役割を賦與されてゐることこれである。*Yt. 19* 編纂の意圖は造始より終末を経て第二の世界に到るまでの *etāna* を *Xvarānah* を中心に展開するにあつたが、本來それぞれの系統に屬する彼等がこの枠内に嵌入されて一本に纏ひ合わされたのである。これ、彼等との關係を首尾撞着することのないように釋去しうる説明の、見出され難い所以であらう。

- 1 この點並びに以下に就ては本誌第一卷第二號二〇〇頁參照。
- 2 これが *Mithra* 神の裁決であること<sup>6)</sup> *Fr. Spiegel: Brānis che Alterthumskunde, 3, p. 601* によつて解明された。
- 3 例へば *Daravahuš* が亞歷山大王に送つた書翰の冒頭に自らを指して「諸王の王にして諸神の同族、また神 *Mithra* との共同王にして太陽と共に現われるもの」(*希文一・三六、拉文一・三七*)と云ふ、或いは亞歷山の歿後、*ヘルシア* 人はその遺體を *ヘルシマ* に持ち歸つて *Mithra* として崇めんと望み、マケドニア人と争つた (*希文三・三四、拉文三・五六*) とある如き。
- 4 *Av. Pisīnah, Pahl. Pīsīnsāi, Pīsīnsch* は *ペキスマン* (以前の英領 *バルチスマン*) の *Pisīn* 溪谷に比定されてゐる。*Kārāsāpa* はこの地にて昏睡に入つた終末の日を待つてゐる。
- 5 *GrBd. 2063 ff.* *ペルサ* を承けつてゐる。 *Vasīkāta* としう *H. Herzfeld: Altpersische Inschriften, p. 144* 參照。
- 6 *eratāona* と *ヘルシマ* の *Traīana* としう *IF. 54, p. 205* 參照。